The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | Madame Bovary 研究 : 色と心理 |
| Author(s) | 難波, 崇子 |
| Citation | Gallia. 1968, 8, p. 51-66 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/12735 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# Madame Bovary 研究

## —色と心理—

難　波　崇　子

### 序

三十五才にして不朽の名作，「ボヴァリー夫人」を完成した Flaubert は，十九世紀フランスの生み出した最大の作家の一人としてその文学史上に輝かしき名前を留めている。

この作品においては，抽象的描写が特異な比喩でもって具体的描写におきかえられるなど，それが視覚化されているという点では，Flaubert の描写は画家の描写にも等しい。また，常に mot juste ということに心をくだいていた Flaubert は，たとえ色彩語一つを選ぶにしても非常な苦労をしたに違いないと思われる。とりわけ物と色の間に固定観念のない場合（木の葉は緑，枝は茶色といった様な観念のない場合），つまりある物に対して作者が自由に色を選べる時（洋服の色など）には，そこに作者の意志が入るわけであるから，選ばれた色彩語は大きな意義を持つことになる。

こうした理由により，私は「ボヴァリー夫人」から引用しつつ，この作品において色の果す役割を調べることを，この論文の主目的とした。

そこで，作品全体を通じて色に関する形容詞，名詞，動詞を全部ぬき出し，その統計を取ったところ，次のような結果となった。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 白 | 系統 | 約24% | 黄 | 系統 | 約5% |
| 赤 | 〃 | 〃18% | 褐色 | 〃 | 〃5% |
| 黒 | 〃 | 〃17% | 灰色 | 〃 | 〃3% |
| 青 | 〃 | 〃11% | 銀色 | 〃 | 〃1% |
| 金 | 〃 | 〃8% | 紫 | 〃 | 〃1% |
| 緑 | 〃 | 〃7% | | | |

これらの色の中で，金，褐色，灰色，銀色，紫については，Flaubert が灰色にはあまり好感を持っていないらしく思われるということが，わずかにわかる程度で，頻度の少ないこと，及び，これらの色がきわめてあり

ふれた使われ方しかしていないという点で，その役割を調べることは不可能に近い。そこで，この論文においては，白，赤，黒，青，緑，黄の六色だけを研究の対象としてみた。

なお，引用文はコナール版により，末尾に（　）でもってページ数を記した。

## 第一章

### I　青 (bleu)

青は，Et elle était ravissante à voir, avec son regard où tremblait une larme, comme l'eau d'un orage dans un calice *bleu*. (428) という一節が示す様に非常にきれいに用いられた例が多く，どちらかというと好感を持って Flaubert にむかえられている色という印象を受ける。これは聖母マリアの服の色が青と白であることから，この二つの色が天国や救いを表わし，キリスト教国では，この色に対する感情が，きわめて良いことにも多少関係するのではないかと思われる。

この青について，一つ一つ検討してゆくと青は主人公エンマの衣裳やほしがるもの，また憧れる世界などに，きわめて多く使われていることから，エンマを象徴する色といえる。たとえば，衣裳については，Elle portait une petite cravate de soie *bleue*, . . . (116) . . . son grand voile *bleu* retomba. (219) . . . Emma qui portait une robe de soie *bleue* à quatre falbalas: . . . (305) vous (Emma) aviez même un chapeau à petites fleurs *bleues*; . . . (325) Emma, maniant délicatement le liséré *bleu* de sa longue ceinture blanche, . . (327) という風に，青が頻繁につかわれている。

更に，Elle voulut sur sa cheminée deux grands vases de verre *bleu*, . . . (84) . . . elle écrivit à Rouen, afin d'avoir une robe en cachemire *bleu*; . . . (173) . . . Emma taisait quantité de ses extravagances, telle que l'envie d'avoir, pour l'amener à Rouen, un tilbury *bleu*, . . . (373) という様な一節がある。これからもわかる様に，エンマの好みの色は，全体を通じて青である様に思われる[1]。

また，エンマは平凡な生活にたえきれず，たえず自分を自分でないものにつくりあげようとし，悪しきロマンチスムに酔っているわけであるが，そうしたエンマの憧れる恋の世界をも，Flaubert は青で表わしている。

たとえば，森の中でロドルフに身をまかせた後，帰宅したエンマについての描写には，Elle entrait dans quelque chose de merveilleux où tout serait passion, extase, délive; une immensité *bleuâtre* l'entourait, .... (225) という一節がある。またレオンとの恋にあきて来た頃には，Mais, en écrivant, elle percevait un autre homme, un fantôme fait de ses plus ardents souvenirs, de ses lectures les plus belles, de ses convoitises les plus fortes; ... Il habitait la contrée *bleuâtre* où les échelles de soie se balancent à des balcons, sous le souffle des fleurs, dans la clarté de la lune. (401～402) という一節がある。

更に，青という色は，海や湖，河など水のイメージと結びつく[2]。

si bien que leur grand amour, où elle vivait plongée, parut se diminuer sous elle, comme l'eau d'un fleuve qui s'absorberait dans son lit; et elle aperçut la vase. (236) ...l'amour, si longtemps contenu, jaillissait tout entier avec des bouillonnements joyeux. (226) les jours, tous magnifiques, se ressemblaient comme des flots; et cela se balançait à l'horizon infini, harmonieux, bleuâtre et couvert de soleil. (272) などの一連の文からもわかる通り，Flaubert は水（青）を持ってエンマの愛の象徴としている。

このようにエンマと青という色は，深いつながりを持っているわけであるが，何故 Flaubert が青でエンマを象徴しようとしたかについては，conte bleu とか，le pays du bleu という言葉から推察して，bleu という色が，本来おとぎ話的な，夢みがちな雰囲気を持っているのだと思える。それがエンマのロマンチスムと結びつくからだろうと思われる。

## II　白（blanc）

Flaubert の使う白は，大体次の三つに分類される様に思われる。

### A　エンマの貞操を表わす白

白がこのような意味で使われるのは，古来花嫁衣装やその花束などに白が使われることからも明らかな様に，白に対するきわめてありふれた感情であるといえる。

シャルルと結婚した当時，エンマの住んでいたトストの家の庭には，石膏づくり（白）の神父像がある。この像は，エンマが夫との平凡な結婚生活に退屈し始め，夫への愛情を失ってゆくにつれ，le curé ... avait perdu

le pied droit, et même le plâtre, s'écaillant à la gelée, avait fait des gales blanches sur sa figure. (89) という風にこわれてゆく。そしてエンマの不貞の物語の舞台となったヨンヴィルに出発直前，エンマが結婚式の花束（白に結びつく）を火の中に投げこみ，シャルルに対する貞節を投げすてたのを暗示すると同様，この神父像もトストからヨンヴィルへの引っ越しの途中，荷馬車から落ち，木っ葉微塵に砕けてしまう。そしてこれは，エンマの夫に対する貞節の心が失われてしまったことを示している。

この例につかわれた白は，共進会の場面でその効果をよく発揮している。

エンマを自分のものにしようと決意したロドルフは共進会の日に巧みな言葉でもってエンマを誘惑しはじめる。そして，その言葉に少しずつエンマの心がゆらぎ始めると，遠景では，on voyait se lever au vent, comme un flot, quelque crinière *blanche*,... という一節がある。(190〜191)[3] また，共進会の中でのクライマックスともいうべき箇所では，ロドルフに手をあずけたエンマに向って，彼は Oh! merci! Vous ne me repoussez pas! Vous êtes bonne! Vous comprenez que je suis à vous! (207) と叫ぶ。そして，その時 Un coup de vent qui arriva par les fenêtres fronça le tapis de la table, et, sur la place, en bas, tous les grands bonnets des paysannes se soulevèrent, comme des ailes de papillons *blancs* qui s'agitent. (207) という一節がある。

このように，エンマの貞操がゆらぎ始めると，背景では遠景から近景へと場所を移しつつ白いたてがみとか，白いズキンがゆらいでいる。つまり白い物がゆらぐことは，誘惑へと向うエンマの心のゆらぎを示すものである。

そして，再会の翌日，教会堂でレオンと逢引きをしたエンマは，不貞へと傾きそうになる自分の心の動揺を静めるかの様に，堂内の静寂さの中に咲く白いジュリエンヌ草に助けを求めている。

B　青い国のシンボル色としての白

先に述べた通り，エンマは青い国に憧れるが，その青い国では un cavalier à plume *blanche* (51) や，une jeune fille en robe *blanche* (52)，また deux petits postillons en culotte *blanche* (52) des cathédrales de marbre *blanc* (271) といったものが登場してくる。そして，この青い国には，白鳥とこうのとりという風に，いずれも全身白い鳥が住んでいる。

また，Au fond de son âme, cependant, elle attendait un événement.

Comme les matelots en détresse, elle promenait sur la solitude de sa vie des yeux désespérés, cherchant au loin quelque voile *blanche* dans les brumes de l'horizon. Elle ne savait pas quel serait ce hasard, ... (86〜87) という一節が示す通り，白という色はエンマにとり，エンマを ennui から救い出し，青い国を象徴する色だといえる。

そして具体的にエンマを ennui から救い出し青い国を実現させてくれたロドルフとレオンが，夫々森へ遠のりに出かける時に，また再会の翌日，二人だけで逢い引きを楽しむ時どちらも白いズボンのいでたちで登場してくるのもうなづけることと思う[4]。

C　エンマの単調な生活，孤独，絶望を表わす白

これは白そのものでなく，白いという印象であるが，舞踏会への招待をむなしく待ち続けた頃，レオンへのひそかな恋心に苦しむエンマがざんげの為に司祭をたずね，取りつく島もないほど的外れの答に絶望して帰ってきた時，そしてロドルフに捨てられた後，病床に伏している時など，いずれも白い光が現われる。そして光や空につかわれた白は，エンマの絶望，孤独，むなしさを暗示するものと思える。

Ⅲ　赤 (rouge)

赤は，La chair s'effiloquait par lambeaux *rouges*;... (369) とか les doigts *rouges* et mous comme des limaces, ... (409) という一節からもわかる通り，青や白に対する Flaubert の感情が比較的よいのに反して，どちらかというと不快感でもって迎えられている色という様な印象を受ける。

Flaubert は，この赤に，権威，怒り，その他を認めているが，最も妥当なのはエンマの官能的な愛，特にロドルフとレオンを相手とする愛を象徴する色として使われているという見方であろう。

たとえば，エンマがシャルルと結婚した当時，二人の寝室のベッドには赤いカーテンが下がっているし，またレオンとの逢い引きの場となったホテルのベッドにも同様に緋色のカーテンが下がっている。

更に，ある日レオンと舟あそびをしている時，エンマは舟の中におきざりにされた真紅のリボンをみつける。実は，それはロドルフが忘れていったものなのであるが，それに気づいてエンマは身ぶるいをするという場面がある。(355)

この例なども，赤という色に，エンマが過去のロドルフとの非常に激しい恋愛をみたのだと思われる。もし，このリボンの色が他の色なら，おそらくエンマを身ぶるいさせるほどの効果はなかったのではないかと思う。

そして，このリボンの赤を表わすのに，rouge ではなく ponceau（これは赤のうちでも，非常に強烈な赤で，けしの花の赤などをいうのだそうであるが），こうした単語を使っている所にも，Flaubert の非常に計算された意図がうかがわれる様に思える。

ロドルフに捨てられた後，病床にふしたエンマが回復しかかった時，シャルルと共に庭を散歩する場面に次のような一節がある。

Ils allèrent ainsi jusqu'au fond, près de la terrasse. Elle se redressa lentement, se mit la main devant ses yeux pour regarder: elle regarda au loin, tout au loin; mais il n'y avait à l'horizon que de grands feux d'herbe, qui fumaient sur les collines. (291)

これは野火（結局，赤というイメージであるが）野火により，回復後のレオンとの出会い，そして姦通を暗示する一節と思われる。

## Ⅳ　黒（noir）

黒が色として，重要な意味を持つ様になるのは，主として物語の後半になる。そして Flaubert は，黒に不安な心とか不吉の前兆，死を認めている。

黒に対するこうした Flaubert の感情は，まずエンマの衣裳の変化にあらわれてくる。エンマは，ロドルフとの愛に於ては，まだうぶで，ロドルフとの愛を本物の恋愛だと信じている様な可愛いい女であったが，そのロドルフに捨てられた後，レオンと再会し，身をまかせると，今度は非常に大胆で，うそつきで悪賢い女へと変わってゆく。が，一方，エンマはロドルフに捨てられた経験から，いつかはレオンも自分をすてるだろうという不吉な予感と，誰かに感づかれはしないかという不安に絶えずおびえている。この様なエンマの心理状態を，Flaubert はレオンと再会後のエンマの衣裳を，これまでの黄色と青から，全部黒にかえることで表現しようとしている様に思われる。たとえば，黒のケープ，黒のドレス，黒のヴェールなどが頻繁に出てくる。

また，Elle voulut qu'il se vêtit tous en *noir*.... (383) という一節からもわかる通り，エンマの好みの色は黒へと移りかわってゆく[5]。

破産宣告を受けた後，お金の融通へと走りまわるエンマには，黒いものがよく目につく。彼女が，あわやけとばされそうになった馬は黒いし，借金を申しこみに行ったギョーマン氏の所では，黒木の額におさまった絵が目につく[6]。そして，最後のたのみの綱であったロドルフからも，お金の融通を断わられ絶望して我家に戻る途中 La nuit tombait, des corneilles volaient. (432) (corneille は黒と結びつく) その直後，エンマはオメーの所にしのびこみ砒素をあおいで自殺する。

またエンマの死を知らせる手紙（といっても，ショックを与えない様にとの心使いから非常にあいまいな書き方をしていたために，結局，内容のはっきりしない手紙なのであるが)，それをもらった父のルオー氏は旅の途中, Il aperçut trois poules *noires*; il tressaillit, épouvanté de ce présage (462) そして，ヨンヴィルにつくとエンマの葬式の支度ができている。

このように，何か悪い出来事のおこる前には必ず黒が関係している。

エンマの葬式では，人々は黒い服を身につけ，墓場に向う柩（この時には，黒い布がかけられている）についてゆく。

## V　緑 (vert)

緑は全体の中で七%しか占めていないのにもかかわらず，非常に特長のある色だといえる。

これまでに述べた青，赤，黒，白は，それぞれ大体に於て色彩心理でいわれている色と感情の関係に一致しているが，緑だけは非常にちがっている。一般に，色彩心理の方では緑という色に，安らぎ，平静，若々しさ，安全，くつろぎ[7] といった様な感情をみとめている。ところが，この作品の中では緑は破滅につながる色と定義されそうに思える。

ここでエンマの破滅の原因を考えてみると第一にシャルルという平凡な夫と結婚したことにより，エンマのロマンチスムがみたされなかったこと，そのために一層悪しきロマンチスムに酔う様になり，ロドルフとレオンを相手とする不倫に走ったこと。第二に，恋愛とはぜいたくな生活の背景の上にしかうちたてられないものだとの誤解から生じた経済的破綻である。

この二つの原因を検討してみよう。

まずエンマを取りまいた三人の男性であるが，何事に対しても鈍感で，愚劣の標本ともいうべきシャルルと結婚したことが，そもそもエンマの不幸の始まりであった。そしてエンマをこの結婚生活の退屈さ，平凡さから

ぬけ出させ，青い国をかいま見させてくれたロドルフ，レオンは同時にエンマを破滅へと導いた人物でもあったわけである。そして，彼らは三人共，この物語の中に，緑の上衣をきて登場してくる。

結婚後，自分の憧れた結婚生活とは，あまりに違いすぎる現実にエンマが絶望しはじめた頃，エンマとシャルルは舞踏会に招待される。この事件は，Son voyage à la Vaubyessard avait fait un trou dans sa vie, à la manière de ces grandes crevasses qu'un orage, en une seule nuit, creuse quelquefois dans les montages. (78) という一節が示すとおり，エンマにとっては非常に大きな事件であった。そして，同時にエンマに自分の現在のつまらなさを思わせて，パリの生活のはなやかさにあこがれさせて，エンマの夢を一層かりたてて後の破滅の大きな原因になったものである。その帰り，エンマは踊りの相手をしてくれた子爵のものと思える緑のシガレットケース[8] をひろう。そして，それは後長く，エンマに破滅の遠い原因となった舞踏会を思い出させる道具となる。

物語の舞台がヨンヴィルに移ると，エンマの不貞の物語が始まる。エンマは，そこで出会ったレオンに，ひそかな恋心を抱く。ある日，乳母にあずけた娘に会いにゆく途中，彼女はレオンに出会い同行を頼むが，その帰り彼女の家の後にある川（先に説明した通り，この川はエンマの愛の象徴である。）には，...de grandes herbes minces s'y courbaient ensemble, selon le courant qui les poussait, et comme des chevelures *vertes* abandonnées s'étalaient dans sa limpidité. (130) また，ロドルフに身をまかせた場所では，... un petit étang, où des lentilles d'eau faisaient une *verdure* sur les ondes. (223) とある。

このように，エンマの愛の象徴である水の上に，緑のものがゆれ動いているということは，エンマの愛が破滅へとつながることを暗示しているかに思える。

第二の原因を考えてみると，エンマを破産においやった商人は，品物を売りにくる時，緑のボール箱に商品を入れてくるし，その時には，たそがれの緑の光線が背景でゆらめいている。そしてエンマに破産の予告にくる男は，緑のフロックをきて姿をみせる。最後に毒をあおいで死んでいったエンマの柩には，シャルルの希望で緑のびろうどの布がかけられる。

このようにみてくるとエンマの破滅につながる一連のものに，多く緑が関係していることから，緑を破滅の色と定義してもよさそうに思える。

以上，説明した様に，Flaubert が緑に認める感情はかなり特異であり，どうして緑と破滅が結びつくのか，これがこの作品だけに於ける特長なのか，それとも Flaubert が緑という色に何か特別な感情を持つ理由があったのか，明らかではない。しかし，Il lui semblait que certains lieux sur la terre devaient produire du bonheur, comme une plante particulière au sol et qui pousse mal tout autre part. (56) とか Ne fallait-il pas à l'amour, comme aux plantes indiennes, des terrains préparés, une température particulière? (82) という一節からもわかる通り，エンマの破滅の一大原因であるロマンチスム的考えで，彼女は自分の幸福や恋を植物にたとえているし，ロドルフに身をまかせた場所が森であったこと，レオンとの逢引きを続けたホテルがブーローニュ・ホテルという名であったことなどから考えてみると，植物，森から緑という色が浮かぶしブーローニュという言葉も森につながることから，ここでも緑が関連してくる[9]。

更に，結婚式の時に麦畑の中を歩いていったのも，その後一歩一歩破滅へとすすんでいったエンマの身の上を暗示している様であるし，最後にエンマの柩が，結婚式の時と同様，緑の野の中を墓場へと運ばれてゆくのも意味深く思える。

こうした事を全部あわせて考えてみる時，緑を破滅の色としたことも案外うなづける様に思われる。

## Ⅳ　黄色 (jaune)

... il se mourait de son catarrhe, au milieu de ses chandelles moins *jaunes* que sa figure. (394) ... les vitres épaisses *jaunies* par les mouches,... (306) という文例が示す通り，この作品においては黄色を美しく使った例は一例もなく，Flaubert は黄色に対して，かなり不快感を感じているようにみうける。

私は，この黄色をエンマのシャルルに対する不貞，裏切りを表わす色としてみた[10]。

エンマは，この作品に三度黄色い服をきて姿をみせる。一度目は舞踏会に行って，子爵と踊った時のドレスであり，二度目は初めてレオンと二人で出かけた時，そして三度目はロドルフに初めて出会った時である。このように，エンマは，シャルルに対する不貞の火つけ役となった子爵との出

会い，更に現実に不貞の相手となったレオン，ロドルフとの出会いにおいて，黄色の服をきている[11]。

またロドルフとの不貞の場となった彼の部屋には黄色いカーテンがつるされ，再会後，初めてレオンと逢い引きをするホテルの壁紙は黄色である。更にルアンにいるレオンのもとへと通うエンマの乗る馬車，イロンデルは黄色くぬられている。

....elle serra pieusement dans la commode sa belle toilette et jusqu'à ses souliers de satin, dont la semelle s'était *jaunie* à la cire glissante du parquet. Son cœur était comme eux: au frottement de la richesse, il s'était placé dessus quelque chose qui ne s'effacerait pas. (78) 舞踏会から帰宅した直後の，この描写は，黄色く染まった靴の裏でもって，シャルルに対するエンマの裏切り（経済的な意味においても，また不貞という意味においても）の心が生まれたことを暗示しているように思われる。

## 第二章　色による文の理解

第一章で各々の色を検討した結果，Flaubert のこの作品における色と感情の関係といったようなものがあきらかにされた。こうした関係を知ることは，もし知らなければ我々が何気なく読みすごしてしまう様な箇所を，よりよく理解するのに役立つと思われる。

I　この一節は，トストからヨンヴィルに移る直前，引っ越しの整理をしている時の描写である。

Un jour qu' en prévision de son départ elle faisait des rangements dans un tiroir, elle se piqua les doigts à quelque chose. C'était un fil de fer de son bouquet de mariage. Les boutons d'oranger étaient *jaunes* de poussière, et les rubans de satin, à liseré d'argent, s'effiloquaient par le bord. Elle le jeta dans le feu. Il s'enflamma plus vite qu'une paille séche. Puis ce fut comme un buisson *rouge* sur les cendres, et qui se rongeait lentement. Elle le regarda brûler. Les petites baies de carton éclataient, les fils d'archal se tordaient, le galon se fondait; et les corolles de papier, racornies, se balançant le long de la plaque comme des papillons *noirs*, enfin s'envolèrent par la cheminée. (94)

これを第一章で説明した様な見方で色と関連させて読むと，結婚式の花束（白のイメージ）が黄色くなっているということは，エンマの心に裏切りが芽ばえたことを示しているように思える。そして，その花束を火(赤)の中に投げこんだということは，シャルルに対する貞操をなげすて，ロドルフとレオンとの姦通へと走ったことを暗示している。“真っ赤な茂みのように”(Comme un buisson rouge) という一節は，非常に激しかったロドルフとの恋愛で彼女がロドルフに身をまかせた場所が森であることとむすびついて面白い。黒い蝶の様になって燃えつきたということは，その後のエンマの死を指すものと思える。

II　これは，ヨンヴィルにおけるエンマの唯一の魅惑であり，希望であったレオンがルアンに去った直後の風景描写である。

M^me^ Bovary avait ouvert sa fenêtre sur le jardin, et elle regardait les nuages.

Ils s'amoncelaient au couchant, du côté de Rouen, et roulaient vite leurs volutes *noires*, d'où dépassaient par derrière les grandes lignes du soleil, comme les flèches *d'or* d'un trophée suspendu, tandis que le reste du ciel vide avait la *blancheur* d'une porcelaine. Mais une rafale de vent fit se courber les peupliers, et tout à coup la pluie tomba; elle crépitait sur les feuilles vertes. Puis le soleil reparut, les poules chantèrent; des moineaux battaient des ailes dans les buissons humides, et les flaques d'eau sur le sable emportaient en s'écoulant les fleurs *roses* d'un acacia. (167)

この一節でルアンの方に黒い雲がうずまいていたというのは，ルアンに去っていったレオンを気づかうエンマの不安な心を表わし，黄金色の太陽光線は，エンマの唯一の希望であったレオンを象徴するものと思える。残りの白いうつろな空は，残されたエンマのむなしい心を暗示する様である。最後にアカシアのピンクの花が流れていくということは，二人の恋もまた流れ去ったことを示している。そして，官能的な愛を赤で表現している Flaubert が，プラトニック・ラブに終った恋をピンクで表現しているのも興味深い。

III　次の一節は，レオンの去った翌日の描写で，ロシアの雪の広原の上に残された焚火の有名な比喩である。

Dès lors, ce souvenir de Léon fut comme le centre de son ennui; il y pétillait plus fort que, dans un steppe de Russie, un feu de voyageurs abandonné sur la neige. Elle se précipitait vers lui, elle se blottissait contre, elle remuait délicatement ce foyer près de s'éteindre, elle allait cherchant tout autour d'elle ce qui pouvait l'aviver davantage; .....

Cependant les flammes s'apaisèrent, soit que la provision d'elle-même s'épuisât, ou que l'entassement fût trop considérable. L'amour peu à peu s'éteignit par l'absence, le regret s'étouffa sous l'habitude ; et cette lueur d'incendie qui *empourprait* son ciel *pâle* se couvrit de plus d'ombre et s'effaça par degrés. (172～173)

レオンとの出会いは，エンマにとって青い国の到来をつげるものであった。そのレオンに去られたあと，彼女は Ah! il était parti, le seul charme de sa vie, le seul espoir possible d'une félicité ! Comment n'avait-elle pas saisi ce bonheur-là, quand il se présentait! Pourquoi ne l'avoir pas retenu à deux mains, à deux genoux, quand il voulait s'enfuir? Et elle se maudit de n'avoir pas aimé Léon; elle eut soif de ses lévres. L'envie la prit de courir le rejoindre, de se jeter dans ses bras, de lui dire: ≪C'est moi, je suis à toi!≫ (172) という一節が示す通り，夫に立てて空しかった貞操をくやむ。ロシアの雪（白）の広原の上に残された焚火（赤）は，こうした彼女のかいなき貞操とレオンによせる恋心を示すものと思える。 lueur d'incendie qui empourprait son ciel pâle とは，単調で空しい彼女の生活を色どっていたレオンへの愛を言っているものと思われる。

IV　これは，ロドルフとの駈け落ち前夜の月の描写である。

La lune, toute ronde et couleur de *pourpre*, se levait à ras de terre, au fond de la prairie. Elle montait vite entre les branches des peupliers, qui la cachaient de place en place, comme un rideau *noir*, troué. Puis elle parut, éclatante de *blancheur*, dans le ciel vide qu'elle éclairait ; (274)

月の色というと，フランスでは一般に白であるが，ここでは緋色の月が現われる。この緋色の月をポプラの枝が黒いカーテンの様に所々おおいかくしているということは，二人の愛に不吉なものがきざしていることを暗示しているのではないかと思われる。事実，この直後，ロドルフはエンマ

に別れの手紙を書き，彼女をすてて一人にげるのであるが，捨てられたエンマの孤独，むなしさを緋色から白にかわった月が表現してる様に思える。

V　この一節は，再会の翌日，レオンにさそわれるままに，エンマが馬車に乗って姿を消す場面である。

Une fois, au milieu du jour, en pleine campagne, au moment où le soleil dardait le plus fort contre les vieilles lanternes argentées, une main nue passa sous les petits rideaux de toile, *jaune* et jeta des déchirures de papier, qui se dispersèrent au vent et s'abattirent plus loin, comme des papillons *blancs*, sur un champ de trèfles *rouges* tout en fleur. (338)

ここでエンマを連れ去る馬車のカーテンが黄色であるということは，エンマは黄色の世界，つまり不貞・裏切りの世界に身をおいていることを示している様である。実際，ここで引きさいた紙きれというのは，レオンにその日の逢い引きを断る手紙であったのだが，それが白い蝶の様に，赤いつめくさの野に散ったということは，エンマの貞操が破れ，レオンとの姦通の世界に入ってゆくことを暗示しているものと思える。

## 第三章　結び

第一章，第二章を通じて，私は色という見地から「ボヴァリー夫人」を検討してきたが Flaubert は色を単に色として扱っているのではなく，感情表現の一手段として扱っていることが明らかにされた。そして，その為にこの作品では，所々色盲的ともいえる様な色の使い方をしている箇所がみうけられる。

たとえば，エンマの髪の色は黒，褐色と二通りに，目の色は黒，褐色，青と三通りに変化する。こうした矛盾は，Flaubert が，その場面，場面の情況にふさわしいと思われる（つまり，その場において彼の感情に一番ぴったりすると思われる）色を選ぼうとした結果だと思える[12]。

第二章のⅢでは，ピンクのアカシアの花が登場するが，私の調べた限り，アカシアの花は白か黄色で，ピンクのアカシアは存在しない[13]。それにもかかわらず，Flaubert がここでアカシアの花をピンクとしたのは，実際にそうした色の花が存在するか否かより，Flaubert にとっては，プラトニック・ラブを表現するには，ピンクという色でなければならなかった

からだと思われる。

そして，まるでこの事を証明するかの様に彼が Sainte-Beuve に書きおくった手紙には，次のような一節がみられる。

Si je mets *bleues* après *pierres*, c'est que *bleues* est le mot juste, . . . (14)

このように Flaubert は色という感覚的なものを通して心理や感情をうつし出している。つまり，彼は，感情から感覚（この場合，視覚）への移行をここで完成させたわけである。そして，よく言われている作者不在の文章というものが，こんな所にもみられるのではないかと思われる。

## 註

(1) アメリカ色彩心理学の権威，F. Birren は，その著書「Color Psychology and Color Therapy」の中で，青を好む人は精神生活を重視する人であると述べている。

(2) 同じく Birren の研究によると，青の具体的連想としては，海，水，湖などがほとんどを占める。

(3) 「感情教育」において，これと非常によく似た一節がある。(Il n'apercevait au delà que les crinières des autres chevaux qui ondulaient comme des vagues blanches;) これは，あきらめていた遺産を思いがけなく手にしたフレデリックが，アルヌー夫人のもとへとはやる心をおさえて，パリにもどる途中の描写である。この一節においても「ボヴァリー夫人」におけると同様，白いたてがみのゆらぎが，アルヌー夫人に向かう彼の心の動揺を暗示しているものと思える。

(4) J. Pommier と G. Leleu の「Madame Bovary」(nouvelle version précédée des scénarios inédits) ではロドルフのズボンは黄色になっている。

(5) 前述の Birren によると，黒を好む人は，表裏二面性の性格をもつという。

(6) この作品では，この例も含め，三ケ所額がでてくるが，あとの二ケ所では額ぶちはどちらも金色になっている。

(7) F. Birren, L. Cheskin の研究による。

(8) このシガレットケースは前述の J. Pommier の「Madame Bovary」では，最初青になっているが二度目から緑にかわっている。

(9) ここで，"l'Hôtel de Boulogne" の Boulogne は，海に面した方の Boulogne の町を指し，森で有名な方の Boulogne を言っているものではない。もし，森の方の Boulogne を指すなら，"l'Hôtel du Bois de Boulogne" となるはずである。そこで，この推論は間違いではないかとの意見があるが，この Boulogne

が海に面した方の Boulogne を指しているものだ，という決定的な証拠もないので，あえて，この推論をも加えておいた。

なお，前述の J. Pommier と J. Leleu の「Madame Bovary」では，この "l'Hôtel de Boulogne" は，初め，"l'Hôtel de Provence と記され，次に "l'Hôtel de Bourgogne" となり，最後に "l'Hôtel de Boulogne" となっている。

(10) キリスト教では，黄色は裏切り者ユダの着物の色であったことから，キリスト教の普及以来，欧米では最下等の色とされている，という説がある。（塚田敢著，「色彩の美学」，紀伊国屋書店発行。）ユダの着物が黄色であったということは，聖書の中では言及されていないので，おそらく伝説的に，そんな説が生まれたものと思える。しかし，ジオットの「ユダの接吻」という絵では，ユダは黄色い着物を着ているし，17世紀，フランスのメッスにおいては，ユダヤ人は黄色の帽子をかぶることを強制されたという記録がある。

(11) ロドルフとの出会いに，エンマが着ていた服については，Flaubert は C'était une robe de couleur jaune という一節を，わざわざ括弧をして付け加わえている。

(12) 同じ様な矛盾はレオンの髪の色についてもいえる。彼の髪の色は blond と châtain と二通りに変化する。

(13) 科学の発達した二十世紀では，ピンクの花の咲くアカシアも存在しうるそうだが，Flaubert がこの作品を書いた時代には，おそらくピンクのアカシアは存在しない，と断言できると思われる。

ここで疑問となるのは，それならば何故 Flaubert は実際ピンクの花の咲く他の花を（アカシア以外の花を）用いなかったのか，ということである。それは，この作品で，レオンがルアンに去ってゆく時期が丁度アカシアの咲く時期と一致すること，また Flaubert にとって，ピンクという色がプラトニック・ラブを表現するのに不可欠であったのと同様，花も可憐なアカシアの花が Flaubert の気持に一番ぴったりし，この時期に咲く花で他に適当なものをみい出せなかったからだと思われる。

(14) (Correspondance, Paris, Conard, t. V, p.p 67-68, A Sainte-Beuve, 23-24 decembre 1862) による。

## NOTE BIBLIOGRAPHIQUE

I—Les textes

Madame Bovary, Paris, Conard, 1910

Madame Bovay, Paris, Garnier, 1964

II—Œuvres de Flaubert

L'Education Sentimentale, Paris, Garnier, 1965.

Trois Contes, Paris, Garnier, 1965.

Correspondance, Paris, Conard, 1902, t. Ⅲ.

Correspondance, Paris, Conard, 1933, t. Ⅴ.

Ⅲ—Ouvrages sur Flaubert

Demorest, L'Expression Figurée et Symbolique Dans L'œuvre de G. Flaubert, (Chapitre Vll, Madame Bovary), Paris, Conard, 1931.

Pommier, J. et Leleu, G., Madame Bovary (nouvelle édition) Paris, Corti, 1949.

Mersch, C., La Genèse de Madame Bovary, Paris, Corti, 1966.

Thibaudet, A., Gustave Flaubert, Paris, Gallimard, 1963.

Wada, S., Etude sur Flaubert, Gallia Ⅱ, 1954.

Ⅳ—その他，一般参考文献

Birren, F., Color Psychology and Color Therapy (Chapter Ⅱ, Emotional Reactions) U.S.A, University Books, 1961.

波多野完治　最近の文章心理学
東京　大日本図書，1965

色彩科学協会編　色彩科学ハンドブック
東京　南江堂，1962

塚田　敢　色彩の美学
東京　紀伊国屋新書　1966

小保内虎夫
松岡　武　色彩象徴テストの原理と方法
東京　日本製版　1964

（大阪大学文学士）